

人生見つめる「大人」の絵本

民放の報道記者だった女性が、退職を機に一人で絵本の出版活動を始めた。仕事と出産・育児の両立に葛藤した経験から、転機を迎えた大人が人生を見つめ直すきっかけとなる「大人の絵本」作りを目標に掲げる。18日には、制作に1年以上かけた初の作品が発売される。

狛江市在住の安永則子さん(42)は元TBS記者。1995

年の入局から昨年退職するまでの大半を報道畑で過ごし、警視庁や東京地検特捜部を担当する事件記者として、休みが欲しいと思わないほど取材活動にのめり込んだ。何事にも手を抜くのが嫌なタイプで、「仕事ばかりしていた」と振り返る。

転機となったのは、34歳で経験した長女の出産と育児。育児後はベビーシッターに預け、以前と同じペースで仕事に励むつもりだったが、「不器用な性格」が災いし、お風呂に入れたり、寝かしつけたりするのも全て自

分でやらないと気が済まなくな

った。3歳下の長男も誕生し、2人がどんどん成長していく姿を見て感じた。「自分にとって大切なのは、子供と一緒に夕食を食べる時間」。葛藤もあったが、最終的には退社し、起業する道を選んだ。

出産後、事業部門で番組の関連書籍作りに関わっていた安永さん。子供たちに日々、絵本を読み聞かせる中で、その深いメッセージ性に共鳴することも多かった。

「自分がそつであつたように、30〜50歳代は出産や介護などを

出版社が記者放民元 転機産出

出話について
絵本願念
安永さん



きっかけに一度立ち止まり、人生について考える人も多いと思う。そんな人の背中を押せる絵本を作れたら」。退職を機に昨年2月、大人向けの絵本を中心に手がける「小さい書房」を設立した。

初出版する絵本は「青のない国」。「青」という色を失った国で、主人公の男は青い花を見つけたが、周囲はそれを青だとは認めない。男はひどく傷つき

自分を見失ったが、最後には自分にとって大切なことは何かに気づくというストーリーだ。構想は自ら考え、絵本作家と

して多くの作品がある風木一人さんに文章を依頼。絵を担当する長友啓典さん、松昭教さんとも納得のいくまでやり取りを重ね、一年以上かけて完成させた。安永さんは「自分のかつての境遇と重ね合わせ、作品には何

が大切かは、自分で決める」というメッセージを込めた。多くの人に人生を見つめ直すきっかけにしてみたら」と話す。

A5判64頁、1300円(税抜き)。全国の書店やアマゾンなどのネット書店で発売。問い合わせは、「小さい書房」(03・5761・4633)へ。